鹽濱

〔日本山海名物圖會三〕鹽濱

海邊の鹵地をけづり、能ならして、平かならしめ、海よりうしほをくみてこれへまきかけ、よく日にかはかし、さらへにてかきならし、よくされたる時、桶へいれて水にたれ、其水を釜にうつして松柴にてたく也、海より潮をくむ、皆女の所作なり、あるひは所によりて樋をかけて、潮を鹽濱へ取もあり、諸國海邊より多く鹽出るといへ共、播州赤穗の鹽を名物とす、

〔地方凡例錄二〕鹽濱之事

鹽濱者、海有國には何國にも雖有、又鹽に不成汐も有て、鹽濱なき海邊も多し、新濱願出れば、田畑新開伺前、大縄反別分間にて相改、鍬下年季致吟味、濱相應地代金も納させ、年季明撿地致ス、仕方は田畑撿地ニ替る事なく、持主限反別を改メ、餘歩も田畑同然ニ差加へ、上中下三段ニ位分致ス、位ノ見分ケ樣は、濱之樣子浪當之模樣宜、浪荒もなく平かにして、鹽之干加減迄宜キを上々とし、其次を中、又潮際度々普請ニも入り、地面高低有場所を下とす、潮を引入り大溝を堀、夫ゟ濱中に小溝を立、濱之内ニ凡壹反歩ニ井戸六七宛堀ル、是は汐を干上ゲて鹽を垂る場所なり、深くは不堀、此溝敷井戸敷者、反別之外ニ除ク、尤海之模樣ニより、溝もなく海ゟ直ニ汐を汲、一面ニ掛る濱も有り、國々所々ニ而少々宛之違有、燒方鹽釜之仕形も、所々の仕來りニ而少々宛違有り、

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、〇中略ふじの山をみれば、さ月の晦日に、雪いとしろうふれり、〇歌略その山はこゝにたとへば、ひえの山を、はたち計かさねあげたらん程して、なりはしほじりのやうになん有ける、

〔鹽尻一〕伊勢物語に、富士の形をしほじりのごとしといへり、歌人其汐じりを秘とす、予海濱に遊びて、鹽竈の煙を見しに、海民鹽を燒くに沙をあつめて堆をなし畦を作す、潮水來りて砂畦をひたす、所によりて潮を汲て砂畦をひたす日々にかくして後沙をつみ、山樣をつくり日に曝す、これを鹽尻